1. 看護とは・・・
看護とは何か・・・、については諸説ありま
す。ナイチンゲールは、「自然が患者に最も
働きかけやすい状態に置くこと(to put the
patient the best condition for nature to act him)」
として、その人らしく自然治癒力に働きかける
機能が看護の専門性であることを唱えまし
た。以後、看護の営みの独自性については、
あえて看護の行うケアを「看護ケア」と表現
したり、ケアリングという言葉で論じられ
たりしています。これらの言葉の使用に当たっ
ては、病んでいる人達に対して行うケアの営
みの尊厳と、その重要性を主張しています。
一般的なケアについての考え方は日常生活
の中にも多々あります。ケアは日本語では
「世話」という表現で使用されます。この世
話の意味については、福沢諭吉の「学問のす
すめ」のなかにも、その解釈が登場してき
ます。福沢諭吉は、世話の字の義という項のな
かで、その意味に「保護」と「命令」の2つ
の重要な意味があることを説いています。

2. 看護人間工学の視点
看護人間工学とは、「看護する人」「看護
される人」のための「ものづくり」を行う学
問だと言えます。この「ものづくり」は、単
に物体としての物をつくるのみではなく、そ
の物の存在はその場の環境をも形成します。
そのものが看護する行為に役立ててこそ、意
味を持つことになります。「ものづくり」は、
仕組みづくりでもあります。物体のみを造る
ではなくて、手順や作法などを含む、システ
ムを構築することもまた重要な「ものづく
り」です。さらには、それらの「ものづくり」を
通じて、人をつくり、そして社会をつ
くります。看護人間工学は、単に作業効率の
追求やケア用具をつくるのみではなく、看護
という営みに裏付けられた、「人間・物系」
に立脚した「ものづくり」の追求が求められ
ます。

3. 看護人間工学の研究動向
人間工学学会における看護人間工学部会は、
これまでに多くの研究発表を行い、部会とし
て冊子を出すなどの積極的な活動を展開して
きました。それらの研究の多くは、大きく2つ
に分けて捉えることが出来ます。一つは、
看護する側に目を向けた作業の改善と、その
作業を支援するための「ものづくり」に関す
る研究です。看護作業の負担を軽減するため
の基礎研究から応用研究まで様々な研究がな
され、多くの成果を上げてきています。もう
一つは、看護される側に目を向けた研究です。 
看護される際の生体負担の研究や、少しでも
負荷を和らげるような作業方法の工夫や道具
づくりの提案が多く発表されてきました。
しかし、これまでの研究成果によって生み
出されたものが、現実の看護場面のなかでど
れほどの変化をもたらしているかと言うこと
4. 看護における「ものづくり」の原点

看護の対象は人間であるがゆえに多様です。その人が抱えている健康問題もまた多様です。健康問題ばかりではなく、それに影響を与える社会的・経済的な課題も抱え、多くのストレスに曝されながらそこに存在しています。

このような看護の現状と、前に述べた看護の本質に立ち戻ったときに、人間工学の学間的思想の本質とも関わった課題を捉えることができます。つまり、作り出されたその道具やシステムが、その人と、いかに一体となって役立っているかという点です。この考え方は、人間工学の考え方の本質でもあります。

とくに、看護人間工学の「ものづくり」に関しては、多様な対象と向き合い、いかに多様な対象を理解し、つくられた物やシステムが、その人と共生しながら役立っているかが重要な鍵となります。

相互浸透論的関係性

![相互浸透論的関係性の図](image)

ワッナーは、人間と環境との関係性を系として捉えることの重要性を主張しました。そのような人間と環境との関係性を相互浸透論的(transactional)関係性と述べています。この考え方は、看護の理論家であるキングの看護の考え方とも関連しています。キングの場合には、看護の提供手段としての患者と看護師の関係性を述べていますので、人間は対象としての患者であり、環境は看護を提供する看護専門家となります。

看護人間工学の場合には、患者や看護師のための「ものづくり」であることから、対象としての人間は、患者や看護師となります。その患者や看護師のための「ものづくり」を相互浸透論的な関係性のもとで捉えるならば、対象である人間と、道具やシステムなどの環境の関係には、お互いに合致した目標と手段が共有されることが重要となります。

超高齢化が進むなかで、さまざまなデザインの変革や試みがなされ、ユーバーサルデザインなどが推奨されています。しかし、一方で、それは誰でも使いやすいようにする標準化の動きであり、結局のところ限界を感じるところもあります。

看護の対象のような多様な人間の「ものづくり」に関わる看護人間工学としてのデザインが、真に役立つ物として、看護実践にどのように応えられるかは、「ものづくり」を進める側の意識の改革が必要となるように思われます。ましてや、それらを使う側が、その物やシステムとしてに目標や手段を同じくして、その関係性を形成するかにかかっていると考えられます。

看護における「ものづくり」の原点とは、つくられた物やシステムが、「使う側」と「使われる側」の意識のなかで結びつきながら、相互浸透的関係性のなかで、いかに機能していくかに、その真価が潜んでいるように思われます。

◆参考文献
1) ナイチンゲール著，薄井坦子訳，看護覚書，現代社，1968
2) 福沢論吉著，橋谷昭彦現代語訳，学問のすすめ，三笠書房
4) 川口孝泰，続ケア技術のエビデンス；看護における環境調整技術のエビデンス，1880-1886，へるす出版，2003